［第 20 回　常民文化研究講座］

民具を語る

民具を語る 1
日時　2016 年 6 月 20 日（月）13:00～16:00
会場　神奈川大学横浜キャンパス 9 号館 911 室（日本常民文化研究所）
発表　「細工物　女性の手仕事の周辺」米津為市郎氏（日本民具学会会員　郷土玩具文化研究会会員）

民具を語る 2
日時　2017 年 1 月 16 日（月）13:00～16:00
会場　神奈川大学横浜キャンパス 9 号館 911 室（日本常民文化研究所）
発表　「最上紅花の魅力―なぜ手仕事なのか 天然染料なのか―」山岸幸一氏
（草木染織家　日本工芸会正会員）

“布” の語る常民文化

佐野　賢治

民具を語る 1 「細工物　女性の手仕事の周辺」米津為市郎氏
2016 年 6 月 20 日（月）13:00～16:00

研究所では、常民文化研究講座の前身の民具研究講座より、民具実測実習を行ってきましたが、2002 年より一時中断し、2015 年の民具研究ワークショップを経て、2016 年度から「民具を語る」研究会として再出発することになりました。企画は、『民具マンスリー』編集部が行い、研究会の報告を誌上に掲載、発表と公開の有機的な連携を図り、民具研究の現状と意義を紹介、論議する場を目指すことにしました。

写真 1　発表者・米津為市郎氏

最初のテーマとして最も身近な衣生活・衣料を取り上げることにし、初回の発表者を名古屋の米津為市郎氏にお願いしました。米津さんは民具研究の先人、礒貝勇から「女性の手仕事」を残すように言われ、冠婚葬祭時にコメなどを入れる袋物を中心に収集、調査研究を 50 年余してきた

写真２　講座風景

写真３　冠婚葬祭時にコメなどを入れる袋物

人です。その大部な資料は丁寧に一点一点、写真を撮りアルバムにまとめられ、箱に詰められて研究所に寄贈されました。今回はその資料を前にして、氏から直接、資料の説明を受ける場として設けられました。

端切れを巧みに組み合わせ歌舞伎に登場する人物や風景を造形する針仕事の見事さ。それは、姑から嫁へと女系で伝えられてきたといいます。本絵が裏打ち紙として残っている袋物から清書した図柄を型紙として用いたこと、浮世絵と同じ製作法に連なることなど、興味深い話が米津さんから次々と披露されました。

柳田国男は『妹の力』はじめ女性の霊力を論じましたが、機織り、針仕事は生活を営む上で最も身近で具体的な女性の力でした。現代の機械生産された物を前にするとき、家族や恋人のために心を込めた手仕事によるモノづくりは別の感慨を呼び起こします。それが何か、女性が縫い上げた小裂細工を実際に手に取り、米津さんと語り合いながら考えるよい機会となりました。研究所ではいずれ、資料を整理し米津さんのお気持ちも汲んだ展示を開催したいと考えています。

当日参加者は、実物を手にしながら布切れのパッチワーク、デザインの巧みさなど、かつての女性の手仕事による丁寧な針さばきに一様に感動し、米津さんの熱のこもった語りぶりから布や針仕事から女性史の一面が描けることを改めて実感しました。

民具を語る２「最上紅花の魅力―なぜ手仕事なのか天然染料なのか―」
山岸幸一氏
2017 年 1 月 16 日（月）
13:00～16:00

「民具を語る」企画では、“布”を通した常民文化を取り上げることにしましたが、第二回は染色、織物をテーマに山形県米沢市に住む草木染作家の山岸幸一氏に語り部と

写真４　山岸幸一氏

写真５　紅花餅と織物作品

写真６　織の道具と繭玉・生糸

して登場してもらいました。

米沢織の織元の次男として高校卒業後、一旦は家業に従事した山岸さんは、機械織の反物になじめず草木染研究家、山崎青樹氏に教示を受け、その後、水質など草木染にふさわしい地を求め、昭和50年に現在の米沢市大字赤崩に工房を開きました。

「心豊かな貧乏人」「心もようを織る」が氏の信条で、染料となる植物から自家栽培し、染料や糸と会話しながら織機に向かうと言います。「よく染まった糸は、その迫力に負け使えないことがある。そういう糸は何年か寝かしておくと糸の方から今が使うチャンスだよ！　と訴えてくる」と糸に対して気後れがなくなった時、氏はその糸を使い始めるといいます。床の間には、米沢地方に特徴的に分布する木霊の供養塔、「草木塔」の掛け軸に向って仕事始めに祈ると言います。

山岸さんの代表的な染職は「寒染紅花」です。煮染をしない冷染技法で織り上げたものにつけた名で、染は湿度が少ない２月、それも真夜中に行われます。氏のごつい手にはあかぎれ一つなく、紅花も含め染料植物はみな薬草であるといいます。山岸さんの染織の話には私達が忘れかけている太陽、風、水など自然の恵みへの感謝が端々にうかがわれました。

当日はパワーポイントが有効に使われ、山岸さん自身の語りと作品にふれながら染織を通した手仕事の世界を具体的にわかりやすく聞く事が出来ました。

研究会には、染織作家、研究者はじめ染織に関心のある方々が参加し、質疑応答も染色の色と草木、媒染剤の関係など具体的で専門性の高いものとなりましたが、その一方、伝統と近代化に対する山岸氏の見解を問うなど広汎に及びました。なお大友真希さんによる参加記が『民具マンスリー』50－1，2017．4に掲載されています。